

2015年6月7日 主日礼拝説教（要旨）

聖書 ルカによる福音書9章28～36節

説教 「栄光に輝く主イエス」 日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松 牧人

主イエスの公生涯の中ほどのある日、三人の弟子たち、すなわち、ペトロ、ヨハネ、ヤコブを連れて登られた山の上で、主イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いたという不思議な出来事が福音書に記されています。「山上の変貌」と呼ばれている出来事です。

ルカによる福音書の報告によってこの話を読んでみると、ルカはこの出来事を夜の出来事として描いているように思われます。それは、弟子たちが栄光に輝く主イエスと、主と語り合うモーセとエリヤの姿を見たときのことを、「ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると」と書いているからです。口語訳聖書では「熟睡していたが、目をさますと」と訳しています。マルコやマタイは何も書いていないのですが、ルカだけは弟子たちの眠りあるいは睡魔に触れているのです。また、ルカはこの出来事を報告するにあたり、「イエスは祈るために山に登られた」（28節）と書き始め、「祈っておられるうちに」（29節）、このことが起こったと、主イエスの祈りを強調しています。

これらのことに留意しながら、山上での出来事を思いめぐらすとどうでしょうか。夜、山で、祈る、三人の弟子、弟子たちの居眠り、そして、主イエスは一人祈り、主イエスを励ますものが天から登場する。これらは明らかに、私たちがよく知っている大事な祈りの場面、すなわちゲツセマネの祈りと重なってくるのではないのでしょうか。ルカはゲツセマネという場所の名前は出さず、「いつものようにオリブ山に行かれると」と書いていますが、主イエスは同じ三人の弟子たちだけを連れて行かれ、彼らは悲しみの果てに眠り込み、主イエスは一人祈り抜かれ、その主イエスを天使が現れて力づけたと書くのです。

つまり、ルカは山上の変貌を主イエスの生涯の祈りの戦いの大事な一場面として理解し、あのゲツセマネの祈りの先取りとして位置づけています。神の子イエスが少しばかりのパフォーマンスをされたというのではなく、ひたすら祈っておられ、戦っておられるのです。そして、父なる神との交わりの中に、自らの行く道を定めようとしておられるのです。

なぜ、主イエスはこのように激しい祈りをしておられるのでしょうか。この箇所は「八日ほどたったとき」という言葉でそれまでの話とつながっています。ペトロが初めて信仰を告白し、主イエスが初めてご自身の苦難と死と復活を予告され、皆に向かって「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（23節）ときびしい勧めをされたところです。それらは、主イエスにとっても祈りなくしては語りえなかったことでしょう。誘惑にめげず、ぶれることなく、その道

を歩みぬくために、主イエスは祈り続けずおられなかったのです。

この祈りの戦いに登場するモーセとエリヤは、旧約聖書の律法と預言者を代表する人たちです。この二人が「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について」話していたというのです。最期とあるのはエクソドスという言葉で、出発とか脱出と訳される言葉です。けれども、このエクソドスは単なる出発や脱出ではなく、主イエスが苦難と十字架の死を遂げ、復活して天に挙げられ、そのことによって救い主の御業を実現することです。モーセとエリヤが主イエスと語り合ったとは、聖書全体を貫く神の救いの御業が語られ、確認されたといつてよいでしょう。神はかねてから約束して来られたとおりに、主イエスに先立ってイスラエルを導いた二人の偉大な証人を通して、主イエスのこれからの歩みを励まし、祝福しておられるのです。だから、そこにこの世のものとは思われぬ栄光の輝きがあったのです。

ところで、ペトロは栄光に輝く主イエスと三人の語りあう光景を目の当たりにして感嘆の声をあげ、山の上に仮小屋を建てましょうと提案しています。彼は、すばらしい出来事をここにそのまま留めておきたい、自分たちもここで栄光に輝く主イエスとずっと一緒にいたいと願ったのでした。しかし、ペトロが夢見心地で語っているうちに、雲が現れ、すべては雲に覆われてしまいます。そして、彼らは何も見えなくなる中で、雲の中からの声を聞くのです。「これはわたしの子、選ばれた者、これに聞け」(35節)。その声がしたとき、そこにはこれまでと同じ姿の主イエスがおられたのです。

この神の御声は、主イエスがヨルダン川で洗礼を受けられたとき、聖霊が主イエスの上に降り「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という天からの声に重なり合います。「お前はわたしの子」という表現は、神が御自身の立てられた救い主を喜ぶフレーズであり(詩編 2:7)、「選ばれた者」は、預言者が歌った主の僕の歌の響きがあります。神が選び立てられたお方は、「叫ばず、呼ばわず、声を巷に響かせず、傷ついた葦を折ることなく、暗くなっていく灯心を消すことなく」人々に仕える僕の道を行くのです(イザヤ 42:1~3)。主イエスは、権力者や富者の道ではなく、人々に仕え、罪人のために自ら十字架を負われるのです。雲の中からの声はこの道を行かれる主イエスに聞き従えという呼びかけです。

主イエスの栄光の輝きは、きらびやかなこの世の王者の輝きではなく、僕の道を祈りと愛をもって歩まれる主イエスに神がお与えになった輝きでした。それならば、主イエスの招きを受け、主イエスの御足のあとに従い行く私たちも、主の御心を求めて祈り、労する日々の中で、少しずつ主イエスに似る者とされ、時が過ぎ、年をとっても、色あせることのない復活と永遠の命の輝きをいただく者とされるに違いありません。